

単元テストと伝統の実力考査で 高い目標の実現を支援 鹿児島県立鶴丸高校

鹿児島県立鶴丸高校は、開校以来4万6000人を超える人材を社会に送り出してきた全国屈指の進学校だ。同校では、学習指導要領で求められている観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の充実を実現するための手段の1つとして、すべての教科・科目で単元ごとの評価を実施し、定期考査を廃止することを決めた。2024年度からのその改革は、教師たちどのような思いと議論によって形づくられたのだろうか。

改革は観点別評価の議論から始まった

鹿児島県立鶴丸高校では、新学習指導要領の実施を受け、教育活動のさらなる充実を目指すため、2023年度、校長、教頭、そして各分掌・学年主任など、14人の教師から構成され、教育課程や教科指導のあり方、大学や研究機関などとの連携のあり方などを研究する「未来プロジェクト委員会」を発足させた。

未来プロジェクト委員会の議論のテーマは多岐に及んだが、23年度の議論において特に重要なテーマとなったのが、資質・能力を育む観点別評価のあり方だった。その議論は常に「鶴丸高校ではどのような生徒を育てるのか」

を出発点に行われたと、小島健志教頭は振り返る。

「鶴丸高校の3年間でどのような生徒を育てるのか。本校で学ぶ今の生徒の姿はどうか。学校を見守る県民は本校に何を求めているのか。14人のメンバーがそれぞれの考えや思いを語りました。忙しい中、貴重な時間を割いて集まるのだからこそ、評価方法などの各論から検討するのではなく、本質的なことから対話を始めました」

東京大学や京都大学、そして国公立大学医学部医学科など、最難関大学を進路目標に掲げて入学してくる生徒が多い同校では、志望校合格のための支援はこれからも変わらない重要な使命であるという点については、未来プロジェクト委員会のメンバー間で意見の



教頭
小島健志
こじま・けんし
同校に赴任して3年目。



教師
渡辺豊隆
わたなべ・とよたか
同校に赴任して2年目。

相違はなかった。しかし、日々の生徒の様子について語り合うと、「生徒は皆、すごく頑張っているけれども、多忙が原因で疲れている生徒がいるのも事実だ」「生徒は学校を信頼しているが、自分で学びの一步を踏み出す力の育成もこれからは重要だ」などと、課題も提示された。



進路指導課主任
蓮香尚矢
はるか・なおや
同校に赴任して10年目。地理歴史・公民科（世界史）。



進路指導課副主任
今門健作
いまかど・けんさく
同校に赴任して4年目。数学科。

学校概要

設立 1894（明治27）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約320人
2023年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、九州大、熊本大、鹿児島大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ130人が合格。

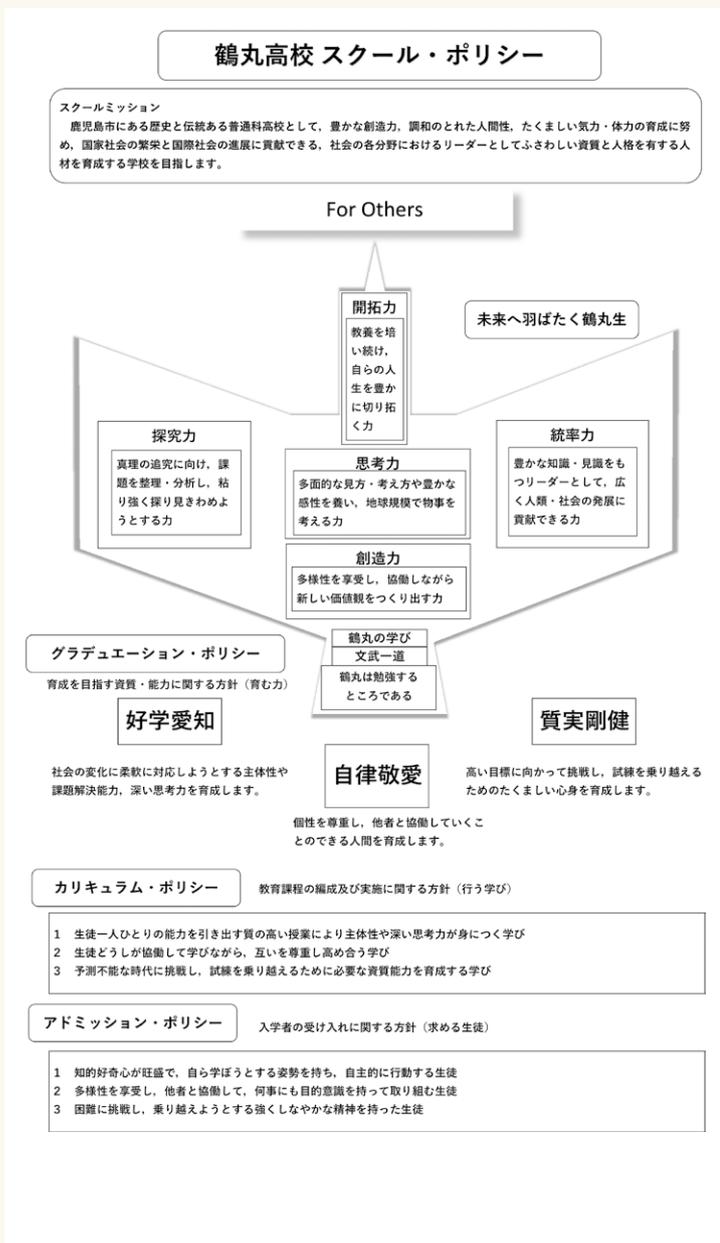
「私たちはスクール・ポリシー（図1）に立ち返りながら、開拓力、探究力、思考力、統率力、創造力の5つの資質・能力を育む教育活動の実現のためにどのような改革が必要か、議論を重ねました。その結果、23年度の夏には、学校行事全般を精選する機運が高まっています」（小島教頭）

スモールステップの意味を問い直す

23年度の秋には、未来プロジェクト委員会において、日常的に生徒が見通しを持って学習できる環境づくりと、指導と評価の一体化による学力の伸長及び進路目標の達成を目的として、単元や題材など、内容や時間のまとまりごとに評価の場面や方法をいかに充実させるか、議論のテーマが具体化していった。そして、ペーパーテストやレポート、発表など、多様な評価方法による単元テストの導入が相上り（せりあがり）に載せられた。

未来プロジェクト委員会のメンバーで進路指導課副主任の今門健作先生は、「生徒が自身の学習の到達度を単元ごとに確認し、その後の学習の進め方の改善に生かすことができる単元テストは、生徒の主体的な学び、そして

図1 鶴丸高校のスクール・ポリシー



※学校資料をそのまま掲載。

希望進路の実現に確かなつながる」と感じた。しかし、単元テストを用いたスモールステップによる評価を行うにつ、これまで同様に定期考査が実施されると、生徒の負担が増えてしまう。だからと言って定期考査の削減や廃止は、進学校での事例がまだ少ないこともあり、単元ごとの評価を行うことの大切さは理解できても、正直不安はあったと率直に語る。

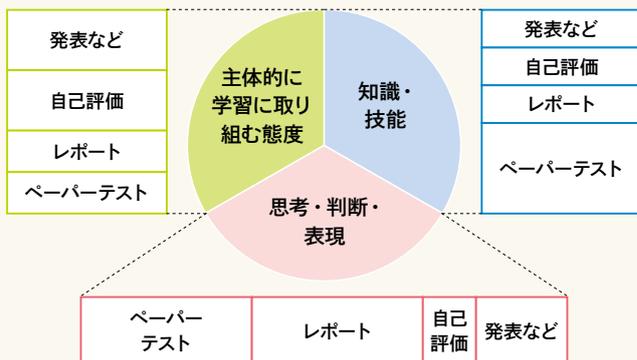
「それでも、最初から『できない』と否定するのではなく、どうすれば実現に近づけるのか、実行しながらよりよい形に変えていくことはできないかと、改善策や代案を挙げながら粘り強く考えるベテランの先生方の姿が印象的でした」（今門先生）

その後、未来プロジェクト委員会を中心に、定期考査を廃止した場合、定期考査期間に実施していた教員研修や

進路検討会などをどこで実施するのかといった懸案事項を、一つひとつ丁寧に議論していった。そして24年2月には、24年度から単元ごとの評価を充実させるとともに、定期考査を廃止することを生徒と保護者に発信した（図2）。渡辺豊隆教頭は、「定期考査の廃止は改革の方法に過ぎないことを丁寧に伝えた」と振り返る。

「単元テストによって、生徒はスモ

図2 生徒と保護者に伝えた評価の方法のイメージ図



※学校資料を基に編集部で作成。

図3 校内で実施する考査の変化

23年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	復習考査	実力考査(1年生・2年生)	前期中間考査	実力考査(1年生・2年生)	前期期末考査	実力考査(3年生)	実力考査(全学年)	実力考査(3年生)	後期中間考査	実力考査(1年生・2年生)	学年末考査	

24年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	実力考査(2年生・3年生)		実力考査(全学年)		実力考査(全学年)			実力考査(全学年)			実力考査(1年生・2年生)	

※学校資料を基に編集部で作成。

ールステップで自分の学習状況を把握することができ、その後の学習の進め方を改善するスパンが短くなること。ペーパーテストを含む多様な評価方法で単元テストを行うことで、一人ひとりの生徒の成長を丁寧に見取ることができ、支援すべき点が明確化しやすいこと。そのように、評価の機会が増え、その内容も充実するからこそ、定期考査の廃止に至ったのだと伝えました」「スモールステップ」という言葉の意味の伝わり方にも同校の教師たちは

気を配った。単元テストは定期考査に比べれば、狭い範囲を対象とした評価となる。しかし、学習の到達目標を下げることはいないため、スモールステップではあるが、出題内容のレベルは難関大学入試を目指すに値するものであることを、生徒と保護者に伝えたい。

その結果、生徒や保護者から、単元ごとの評価の充実に伴う定期考査の廃止について否定的な声が上がった。

新しい仕組みの中で改善を続けていく

24年度の同校の校内考査の実施内容は様変わりした(図3)。実力考査では校内偏差値や順位、度数分布を生徒に示すが、学習の到達度を確認する単元テストでは相对比较は行わない。どのような方法で観点別評価を行い、総合的評価が行われるのかを、生徒は各教科・科目が作成する単元シラバスで確認してから学習に取り組む。単元シ

ラバスには、全教科・科目共通の掲載項目があり、シラバス作成時にそれらの項目の記載漏れがないよう、チェックシートで確認している(P.18 図4)。単元テストの1日あたりの実施教科・科目数の上限などは教務課が中心となって検討しているが、生徒や教師の声に耳を傾けながら、自校に最も合ったスタイルに練り上げていく考えだ。

新しい環境への対応が求められる生徒の様子にも、教師たちは目を凝らしている。日々の学習で自走することができているか。その自走は希望進路の実現につながるものなのか。そうした点を教師が正確に判断するためにも、単元テストの精度が問われる。単元テストの内容の難易度が高すぎると、生徒は学習上の課題を自分で発見しにくくなる。単元シラバスでは、その単元の観点別の学習状況として、「おおむね満足できる」状況、つまり評価規準は明記されるが、その評価規準の設定を教師たちは重要視している。

「難関大学志望の多い本校の生徒に求める評価規準をきちんと設定することによって、単元の指導計画の焦点が絞られますし、単元テストの内容もおのずと見えてきます。単元シラバスと単元テストは、まさに授業改善と一体化したものです」(小島教頭)

単元テストでは校内順位など、相対的な成績が算出されることはないが、評価規程が確立された単元テストの結果を蓄積し、生徒が折に触れて参照できるようにすれば、その教科・科目における自身の伸びや課題を生徒が確認しやすくなるのではないかと、渡辺教頭は考える。

「生徒が単元テストの結果を記録し、振り返ることができるとシステムの構築を検討しています。今回のような大きな改革では、実践さえすれば終わりというわけではなく、工夫や改善を途切れさせないことが求められていると感じています」（渡辺教頭）

「私は本校に赴任して10年目ですが、その間に社会は大きく変化しました。しかし、社会の有り様は変わっても、

新しい一歩は 原点帰帰の一歩

全国屈指の進学校であるとともに、先駆的な改革を続ける鶴丸高校。未来プロジェクト委員会のメンバーだけでなく、全教師がこれからの自校のあり方について議論し、それぞれの考えを深めてきた。進路指導課主任の蓮香尚矢（はな香 しのぶ）先生は、「本校がこれまで追い求めてきた教育は、これからも不変の価値を持つて、議論の中で確認することができた」と語る。

「私は本校に赴任して10年目ですが、その間に社会は大きく変化しました。しかし、社会の有り様は変わっても、

図4 シラバス作成時のチェックシート

- 教科名の表示がある。
- 科目名の表示がある。
- 単位数が表示されている。
- 対象が明示されている。
- 使用教科書が明示されている。
- 副教材などが明示されている。
- 学習の目標が掲載してある。
- 学習内容が掲載してある。
- 学習計画（進度表）が掲載してある。
- 評価の観点に掲載してある。
- 評価規程（「おおむね満足できる」状況に到達した姿など）が掲載してある。
- 評価方法が掲載してある。

・生徒に示すことで、生徒が計画的、主体的に学習できるような構成である。
・学校のウェブサイトに掲載しても、学習内容や評価方法について保護者などから疑義を持たれず、説明を果たせる内容である。

※学校資料を基に編集部で作成。

鶴丸高校で育成を目指す生徒像は決して変わってはいないことを、スクール・ポリシーについて様々な先生方と話す中で気づきました。一方で、生徒の気質は変化しています。かつての本校の生徒は『人から言われなくても自ら学ぶことができる』と地域から評価されてきました。しかし、時代が進むにつれて、教師から『こうすればいいよ』と言われることを期待する生徒が増えてきたように思います。単元ごとの評価を通して自ら学習改善に取り組み生徒を育てることは、本校の原点帰帰の一歩なのかもしれません」

また、蓮香先生は、一連の議論を通じて、生徒の実力把握と教師の指導力向上という点での実力考査の重要性を実感したという。

「本校は実力考査の作問に力を入れており、例えば3年生の実力考査の問題は、教科団全員で約2か月かけて完成させています。その結果、実力考査の成績を基にした精緻な進路指導を実現することができています」（蓮香先生）

同校に赴任して4年目の今門先生は、「本校の教師は、実力考査の作問の場で先輩教師から作問に必要な視点を学び、指導力を高めてきた。その伝統も、希望進路を実現できる生徒を育

てたいという思いによって受け継がれてきた」と語る。

「今回の改革の目的が『多忙感』の解消だったとしたら、実力考査の実施回数も減らそうという声が出てきたかもしれません。そういった声が出なかったのは、改革の出発点が『どのような生徒を育てたいか』だったからであり、むしろ実力考査の重要性を皆が再認識したと思います」（今門先生）

渡辺教頭は、「大きな改革だったからこそ、先生方と熱い議論もあり、大切なことを確かめることもできた」と振り返る。

「議論の過程で一人ひとりの教師の考え方の違いも見えましたが、これまで通りでよいわけではないという向上心、そして生徒のためにもっとよい学校にしたいという思いは皆一緒であることを実感できたのは、何よりの成果でした」（渡辺教頭）

大きな可能性を持った生徒がそれぞれの力をより発揮できるような学校にバージョンアップするために、新しい一歩を踏み出した伝統校の教師たち。スクール・ポリシーに掲げる「開拓力、探究力、思考力、統率力、創造力」を、教師自身が発揮している。